

「わがまち高崎」その成り立ちを探る ～高崎古墳ロマン紀行～

令和2年度高崎学検定講座 令和2年9月26日(土)
市民活動センター・ソシアス 綿貫鋭次郎

1. はじめに

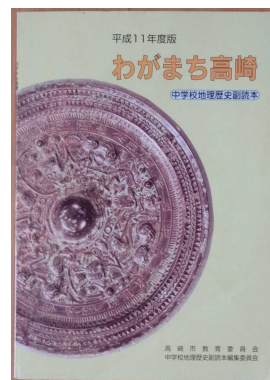
古墳の存在は、私たち高崎市民にとっては実に身近なものでした。とはいえ、実際の生活の中でそれを身近な存在と感ずることができるかと言えば、残念ながらそうとは言えません。それでも、古墳王国群馬として、古墳がマスメディアで取り上げられる機会が増え、綿貫観音山古墳出土品が国宝指定の答申を受け、その価値が脚光を浴びて人々の関心も高まってきています。

平成10年度に高崎市中学校社会科副読本『わがまち高崎』の「歴史編 原始・古代」の編集を担当し、教材としての文化財を見直す機会を得て、市内に残る遺跡とその遺構・遺物から原始・古代の歴史学習が十分に可能であることを実感しました。

この副読本（帝国書院版）で紹介した日高遺跡の地層の様子は東京書籍版の社会科教科書『新しい社会歴史』の「考古学の窓」というコラムで三内丸山遺跡や吉野ヶ里いせきとともに紹介されています。

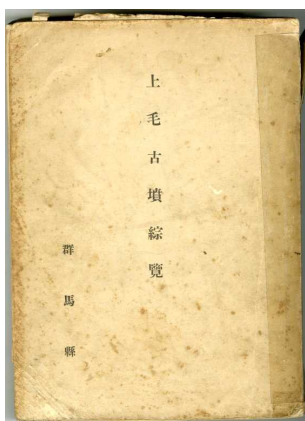
中学校の歴史学習では、古墳時代について「①大和政権の発展、②古墳文化、③中国・朝鮮半島との交流、④大陸文化を伝えた渡来人」を学習内容としており、これを1時間の授業で学ぶということになっています。これを座学で学び理解するのは少し難しいと思いますので、これとは別に身近な地域の調べ学習などを活用しています。

さて、本日の高崎学検定講座では、「高崎の古墳時代を学ぶ」ということを学習課題としてお話ししたいと思っており、市内に残る古墳を題材（教材）に古墳の造られた時代について考えてみたいと思います。



2. 高崎の大地に登場した古代のモニュメント「古墳」～学史を振り返って～

(1) 「古墳」への注目と関心の高まり



古墳の存在が身近で大事なものという認識は昭和10年に県下一斉の古墳調査が行われたことでも明らかで、昭和13年に『上毛古墳総覧』としてまとめられ、8423基の古墳の存在が確認されています。この調査は古墳が特別に大切なものという認識で小学校長及び警察署長に命じて実施されました。（昭和10年7月に学務部長・警察部長発出）

この調査は、今日の古墳研究においても実に大きな意味を持つもので、これをもとにその後の古墳研究が進みます。戦後になって、自由な学問研究が可能となって考古学研究も行われるようになり、群馬県下においては群馬師範学校（後の群馬大学）の尾崎喜佐雄博士が昭和21年から昭和45年まで県内300基以上の古墳の調査を行い、その成果は『横穴式古墳の研究』（1966）としてまとめられています。

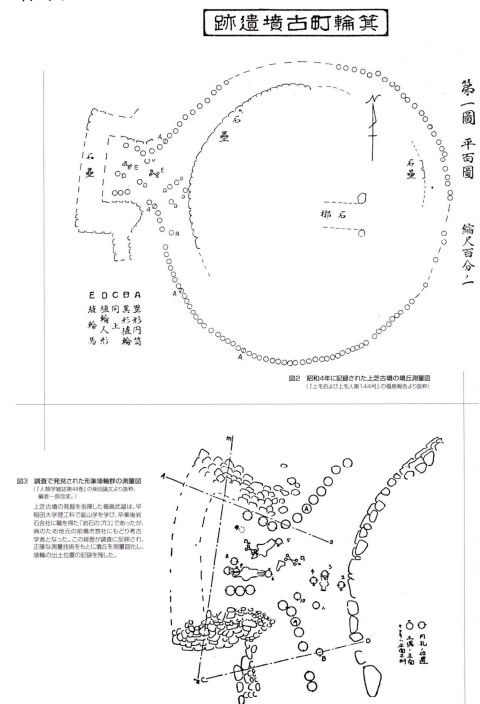
昭和40年代の高度経済成長の時代には各地で開発に伴い多くの埋蔵文化財が危機の時代を迎え、各地で文化財保護の運動が起こってきます。百舌鳥古墳群中の巨大前方後円墳が姿を消していますし、土砂採取して宅地開発が計画されたイタスケ古墳では工事差し止めの保存運動が起こっています。

こうした文化財保護の動きも各地で盛んになり、埋蔵文化財への認識も変化して行政機関にも専門職員が配置されて行政による記録保存を目的とした緊急調査の時代へ変化してゆきます。こうした動きは新たな発見をもたらし、考古学の大きな発展をもたらします。

奈良国立文化財研究所による平城宮跡や藤原京跡の調査や、奈良県立橿原考古学研究所による高松塚古墳や藤ノ木古墳の調査成果は大きなニュースとなり考古学への関心を多に高めました。

(2) 群馬県下での古墳に関する古記録や調査

- 天和 2 年 (1682) 保渡田薬師塚から鏡・勾玉・馬齢・馬鐸が出土 (重要文化財)
- 元文 3 年 (1738) 太田市今泉口八幡山古墳から石棺・副葬品が掘り出される。
- 寛政 4 年 (1792) 関重嶷『発墳歴』
- 文政 2 年 (1819) 総社二子山古墳開口、副葬品出土
- 天保 7 年 (1836) 伴信友『上野国三碑考』
- 明治 11 年 (1878) 前橋市前二子・中二子古墳、安中市築瀬二子塚古墳が発掘された。
- 明治 13 年 (1880) アーネスト・サトウによる前橋市前二子古墳の調査
- 明治 27 年 (1894) 富岡市北山茶臼山古墳から鏡、石釧などが発見された
- 明治 34 年 (1901) 永井潔が吉井町の古墳を発掘
- 明治 35 年 (1902) 柴田定恵が伊勢崎市上植木廃寺の調査の報告
- 明治 45 年 (1912) 宮崎県西都原古墳群の発掘
- 大正 3 年 (1914) 『上毛及び上毛人』創刊
(上毛郷土史研究会)
- 大正 7 年 (1918) 松田鑽が藤岡市金山瓦窯跡を発見
- 大正 8 年 (1919) 「史蹟名勝天然紀念物保存法」公布
- 大正 11 年 (1922) 濱田耕作『通論考古学』
- 昭和 4 年 (1929) 柴田常恵ら箕郷町上芝古墳を発掘
福島武雄ら群馬町保渡田八幡塚古墳
後藤守一らが群馬町井出二子山古墳
後藤守一が『赤堀茶臼山古墳』報告書
後藤守一らが藤岡市白石稻荷山古墳
杉原荘介が高崎市竜見町遺跡を発掘
- 昭和 5 年 (1930) 「竜見町式土器」
- 昭和 8 年 (1933) 古墳調査開始
- 昭和 10 年 (1935) 相川龍雄が上野国分寺出土文字瓦集成
杉原荘介が吾妻町岩櫃山鷹の巣遺跡を
発掘「岩櫃山式土器」
赤城村樽遺跡を発掘「樽式土器」
『上毛古墳綜覧』刊行
- 昭和 11 年 (1936) 國學院大學が境町北米岡遺跡を発掘。(古墳時代祭祀跡)
- 昭和 13 年 (1938) 萩原進が吉井町稻荷山古墳を発掘
- 昭和 17 年 (1942) 高崎市観音塚古墳から多数の副葬品出土、大阪府黒姫山古墳発掘
- 昭和 18 年 (1943) 相沢忠洋が岩宿遺跡を発見、静岡県登呂遺跡の発掘が始まる
- 昭和 20 年 (1945) 尾崎喜佐雄らが倉淵村水沼遺跡を発掘 (初の弥生住居)
- 昭和 21 年 (1946) 粕川村鏡手塚古墳 (月田古墳群) の発掘
- 昭和 22 年 (1947) 赤城村津久田遺跡を発掘 (初の古墳住居)
- 昭和 23 年 (1948) 群馬大学が朝倉Ⅱ号墳、太田市鶴山古墳を発掘、太田市寺井廃寺を発掘
- 昭和 24 年 (1949) 日本考古学協会設立、野尻湖でナウマン象の臼歯化石発見
明治大学が岩宿遺跡を発掘 (旧石器時代)
藪田芳雄が桐生市千網谷戸遺跡を発掘
- 昭和 25 年 (1950) 群馬大学が新里村中塚古墳を発掘
- 昭和 27 年 (1952) 松島榮治らが太田市石田川遺跡を発掘「石田川式土器」
- 昭和 28 年 (1953) 京都府椿井大塚山古墳から多数の三角縁神獸鏡出土
- 昭和 29 年 (1954) 群馬大学あ子持村伊熊古墳を発掘、Hr-FP 下の調査
宮城村白山古墳から和同開珎・銅碗出土
- 昭和 31 年 (1956) 群馬大学が太田市朝子塚古墳・子持村有瀬 1 号墳を発掘
- 昭和 33 年 (1958) 群馬大学が吉井町入野遺跡を発掘 (土師器の編年研究)
- 昭和 34 年 (1959) 群馬大学が榛東村高塚古墳を発掘



昭和 35 年 (1960)	高崎市観音塚古墳の測量調査
昭和 36 年 (1961)	尾崎喜佐雄が宮城村宮田遺跡で古墳時代の水田畦を、 子持村熊野遺跡の発掘で古墳時代の畠発見 宮城村片並木遺跡で製鉄遺構を調査
昭和 37 年 (1962)	群馬県立博物館が甘楽町笹遺跡を発掘 (滑石工房発見)
昭和 38 年 (1963)	群馬大学が伊勢崎市お富士山古墳を発掘 『群馬の遺跡』(群馬県教育委員会) 刊行
昭和 39 年 (1964)	立正大学が藤岡市金山瓦窯跡を発掘
昭和 40 年 (1965)	駒澤大学が太田市菅ノ沢遺跡を発掘 (須恵器窯跡・製鉄炉)
昭和 41 年 (1966)	前橋市八幡山古墳の発掘 尾崎喜佐雄『横穴式古墳の研究』刊行
昭和 42 年 (1967)	高崎市綿貫観音山古墳の発掘 (群馬県立博物館・明治大学) 群馬大学が高崎御部入古墳群の発掘
昭和 43 年 (1968)	前橋天神山古墳の発掘 前橋市宝塔山古墳の羨道入口部の発掘
昭和 45 年 (1970)	榛名町奥原古墳群の発掘
昭和 46 年 (1971)	渋川市東町古墳、坂下古墳群、太田市米沢二ツ山古墳が発掘 水野正好「埴輪芸能論」(保渡田古墳群出土埴輪群から)
昭和 47 年 (1972)	赤城村三原田遺跡の発掘 (大規模発掘の始まり) 群馬県教育委員会に文化財保護室新設 『群馬県遺跡台帳』(群馬県教育委員会) 刊行
昭和 48 年 (1973)	群馬県教育委員会文化財保護課 『群馬県遺跡地図』刊行 関越自動車道・上越新幹線関連遺跡の発掘調査が始まる ※市町村教育委員会にも文化財担当の専門職員の配置が始まる。

(3) 群馬県の考古学史を振り返って

すでに戦前から古墳が多く残されていることに関心が持たれ、先駆的な発掘調査が実施され、また、県下一斉の古墳調査も『上毛古墳綜覧』という形にまとめられ、群馬県内に 8423 基の古墳の所在が確認された。この段階では古墳の所在確認ができたということであり、これに基づく古墳研究が群馬師範学校 (後に群馬大学) に赴任してきた尾崎喜佐雄氏により精力的に進められることになった。岩宿遺跡発見に始まる群馬県の考古学研究は、各大学の考古学研究室がそれぞれの研究テーマに基づいての発掘調査を進め、成果をあげています。昭和 30 年代には『群馬の遺跡』(1963) が刊行され、遺跡台帳や遺跡分布図の整備などが進められるようになり、昭和 40 年代に『群馬県遺跡台帳』や『群馬県遺跡地図』が刊行されています。

古墳研究に転機をもたらす重要な発掘が昭和 42 年から始まります。ひとつは群馬大学による前橋天神山古墳の発掘であり、もうひとつは群馬県立博物館と明治大学による綿貫観音山古墳の発掘で、群馬県における始まりと最終段階の前方後円墳が調査され、多大な成果をあげたことである。その出土品は国指定重要文化財に、古墳も史跡指定され、綿貫観音山古墳については全国に先駆けての復元整備が進められ、現在も多くの見学者で賑わっている。出土品を保管展示する施設として群馬の森公園内に群馬県立歴史博物館が造られ、その出土品はまもなく国宝指定となります。

考古学という学問は、戦後の登呂遺跡の発掘調査を契機として、大学の考古学研究室を中心に取り組まれてきましたが、高度経済成長期を迎える頃には各地で文化財保護の動きが高まった。特に大阪では巨大前方後円墳が土砂採取と宅地開発のために破壊されるという事例が増え、「イタスケ古墳保存運動」が起こった。こうした動きは遺跡の開発＝破壊か文化財保護かという問題を提起し、行政が取り組む必要に迫られ、専門部署が立ち上げられるという動きにつながる。国の機関として、文化財保護委員会が文化庁となり、地方公共団体では教育委員会内に文化財保護課の設置が見られるようになりました。

(4) 群馬県内の文化財保護行政の動き

昭和48年に群馬県教育委員会文化財保護課が新設され、関越自動車道・上越新幹線・上武国道という基幹交通網の整備に先立っての遺跡の発掘調査が行政機関によって実施されることになりました。基幹交通網の整備と周辺の大規模開発（工業団地や住宅団地の造成）・農業の基盤整備事業（圃場整備や灌漑事業計画）・都市計画事業（区画整理や都市再開発）など開発行為がこの後急増してゆきます。基幹交通網の建設工事は国・県の事業として進められますが周辺地域の開発に直結し、各市町村にも埋蔵文化財の専門職員の配置が始まります。

昭和50年代に全国の発掘件数は1万件を超えるようになり、全国各地で発掘調査が行われるようになりました。当然、新聞紙上を賑わす大発見も各地で相次ぎますが、この時代に最もセンセーショナルなニュースは「高松塚壁画古墳」の発見であったと思います。その後は「藤ノ木古墳の未盗掘石棺」やさきたま稲荷山古墳の「金錯銘鉄剣」などが続きました。

群馬県では埋蔵文化財に関する専門機関として昭和53年（1978）に「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団」が、昭和55年（1980）に「群馬県埋蔵文化財調査センター」が勢多郡北橋村に発足した。



事業団の主要業務

- ①埋蔵文化財の調査・研究（発掘調査、②出土遺物・記録図面・記録写真等の学術資料の整理、年報・研究紀要の作成）③埋蔵文化財保護思想の普及（現地説明会・公開普及デー・ぐんま考古学講座等の開催・情報誌の発行、埋蔵文化財関連講座などへの講師派遣）④埋蔵文化財および関連資料の保管、刊行など⑤埋蔵文化財調査の技術指導（調査技術・方法等の指導・協力）

(5) 文化財保護の取り組み

「誇りうる文化財」

- ① 文化財保護の目指す「どんな価値があるのか」
- ② 文化財保護への取り組み「行政の条件整備と市民による価値の共有」
- ③ 文化財の普及活用「私たちの生活にどのように取り入れてゆくか」

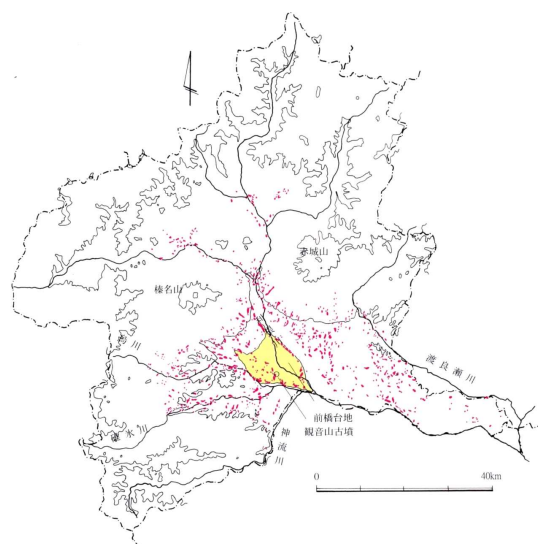
昭和二十五年法律第二百四号文化財保護法では、第一章総則においてその目的を

「第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」としています。

文化財保護行政の置かれた現状を振り返ると急増する埋蔵文化財の発掘調査に対応に終始し、「記録に残すための緊急調査」に日々取り組むことが続いて、実は多くの遺跡が姿を消しているのです。学術調査というわけにもいかず、諸条件の制約の中での記録保存が埋蔵文化財がおかれている現状と言えます。

それでも調査報告書が作成され、書面ではあるが調査内容が報告されることで遺跡の価値が共有されるようになってきています。「保存」の原則は行政機関内に定着してきたように見えます。一方でその「活用」と言えば、世界遺産や国宝・重要文化財といった肩書きがあれば手厚く取り扱われるようになりますが、それは極めて希で、多くはまず地域でその価値を認識して守ることがまず第一歩となります。

「地元で気付いてそれが伝えられる」ことが出発点になると思います。その意味で、私たち文化財に関わる人間が、そのことを主導していく責務をおっていると考えます。幸いなことに、この講座をはじめかみつけ塾や歴史と文化を考える会、博物館講座等、各地で動きが広がりつつあり、「活用を図り」「文化的向上に資する」という動きも着実な歩みを見せています。



群馬県城の古墳群の分布

「群馬県古墳分布図(群馬県1981)を使用し」

本日の高崎学検定講座では、私たちの身近に存在する古墳について「それがどのようなものなのか」をこれまでの研究成果を振り返って、「古墳とは何か」「どのように造られたのか」や「そこに納められた副葬品は何を物語っているのか」など、古墳研究の現状の一端を紹介し、その価値を見直すことを目的としています。古墳の発掘調査については多く関わってきたという自負はあり、実際に発掘調査を通して得た経験や知見を伝えることは大事なことと思います。それを「わがまち高崎」に残された古墳とその時代について理解を深めたいと思っています。

3 高崎の大地に定住した人々足跡を辿って

(1) この地にたどり着いた人々の足跡

旧石器時代の遺物（打製石器）
縄文時代の土器（縄文土器）と石器
狩猟・採集の生活、土器と竪穴住居跡

(2) 米作りのムラ「弥生時代」

弥生土器：貯蔵形態（壺）、煮沸形態（甕・甑）、
供献形態（高坏・鉢・器台）
機能的なつくりで、装飾も簡素である。
岩櫃山式（中期前半）～竜見町式（中期後半）
～樽式（後期）・・・古墳時代（土師器）
米作りのムラの構造

居住域（集落）・生産域（水田址）・墓域（共同墓地）で構成：日高遺跡・新保遺跡、

(3) 弥生の墓～吉野ヶ里遺跡～

埋葬形態・埋葬方法の多様性
土壙墓・木棺墓・箱式石棺墓・甕棺墓・再葬墓・方形周溝墓・台状墓・墳丘墓
出土遺物：銅鏡、銅剣、玉類、

※『魏志倭人伝』に記載された小国（クニ）の様子が明らかに

環濠集落（高い防御性）墳丘墓
銅鏡（漢式鏡）による時期比定（戦国～秦～前漢～新～後漢～三国）

(4) 古墳出現

新石器時代及びその以後青銅器時代において、墳墓は各種の発達をなし、愈々恒久的性質を現さんとし、巨大なる石材を用い、高大なる墳墓を築くもの多きを見る。・・・此れ等墳墓は各国時代を異にするも、その構造相類し、その分布は欧州諸国、アフリカ北岸、印度、志那、日本等に及び、・・・我が国に於ける高塚石室古墳は、原始時代より下って奈良朝に至る迄造られしが如し。（浜田耕作『通論考古学』1922. 7. 15大鏡閣）

キーワード「高塚」人工的に盛土をして高塚を築き、「その墳頂に埋葬施設を造る。」

(5) 群馬県古墳研究の歴史

江戸時代 保渡田薬師塚古墳、太田市今泉口八幡山古墳、総社二子山古墳

明治時代 ウィリアム・ガウランドやアーネスト・サトウの調査

柴田常恵 「上野武蔵の古墳及び先史遺蹟」

後藤守一 赤堀茶臼山古墳や白石稻荷山古墳を発掘

黒板勝美 『上毛古墳綜覧』

尾崎喜佐雄 県内古墳の発掘調査

(6) 『上毛古墳綜覧』の調査結果から

昭和10年から行われた古墳調査では8423基が報告されたが、西毛地区は3367基で約40%を占める。さらに、多野郡1692基（20%）、群馬郡932基（11%）、碓氷郡386基（5%）、北甘楽郡357基（5%）となっている。

多野郡平井村643基、美九里村244基、多胡村187基、吉井町161基、藤岡町93基、
美土里村85基、八幡村77基、神流村76基、入野村63基、日野村53基
高崎市238基、群馬郡倉賀野町207基、車郷村139、金古町111基、佐野村81基
北甘楽郡富岡町97基、福島村54基、高瀬村50基
碓氷郡岩野谷村71基、八幡村50基



文化庁で古墳数統計を出しているが、都道府県別に見ると以下となっている。

総数：159636、1 兵庫県 18851、2 鳥取県 13486、3 京都府 13016、4 千葉県 12765、5 岡山県 11810
6 広島県 11311、7 福岡県 10754、8 奈良県 9700、9 三重県：7025、10 岐阜県 5140、11 群馬県：3993

4 現在までの古墳時代研究を振り返る

(1) 考古学の基本「時間のものさし」(編年研究の方法)

①新旧関係を明らかにする

新旧の相対的な比較研究「時期区分」

地層累重の法則(地層堆積は時間の差異を表す。上層は新しく、下層は古い。)

遺構や遺物の形式的変化

⇒型式学的研究(タイプロジー)相対的な時期区分

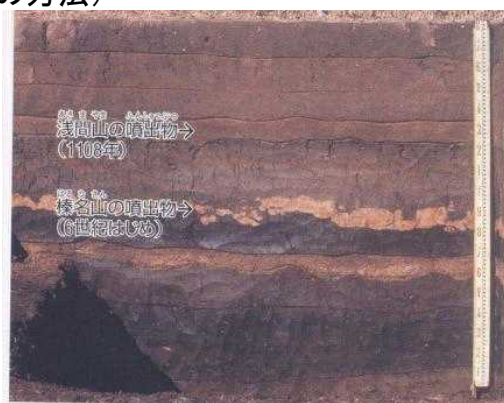
②絶対年代を求めて

文献資料との比較研究

(史料批判が必要：本源性批判・真純性批判)

自然科学的な年代測定

降下火山灰による年代決定



①火山の噴火のあとがわかる地層 浅間山の噴火物は、平安時代の記録から、1108年の

(2) 古墳時代の編年研究

現在までに、前期・中期・後期・終末期に大きく時期区分され、さらに11期のこまかな古墳編年が提唱されている。

①前方後円墳の形状・規模・規格

群馬県は東国では最も多くの古墳が造られ、群馬県内の古墳でその変遷を追うことができる。尾崎喜佐雄博士による精力的な古墳研究。

②埋葬主体部と埋葬方法

竪穴式石室から横穴式石室へ

③副葬品の研究

⇒弥生時代から古墳時代にかけて銅鏡など中国からの舶載された遺物があり、鏡式による変遷がたどれる。

「漢式鏡」の代表的なものに、内向花文鏡や方格規矩鏡(TLV式鏡)、三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡などがある。

⇒こうした副葬品について、当初は舶載によってもたらされた渡来文物と考えられるが、やがて国内で生産されるようになる。

柴崎蟹沢古墳出土「三角縁神獸鏡」

北山茶臼山古墳出土「方格規矩鏡」

※伝八幡原出土「狩獵文鏡」はオリジナルな文様として注目

④埴輪の編年研究

はじめは特殊器台型埴輪、吉備に始まり大和に伝わる

底部穿孔壺形土器「元島名将軍塚古墳」墓前祭祀の壺、特殊器台

円筒埴輪・朝顔型埴輪、形象埴輪(家形、器財、人物、動物)

野焼き焼成(黒斑あり)から埴輪窯焼成へ(本郷埴輪窯跡、駒形神社埴輪窯跡)

須恵質埴輪(さきたま古墳群)

円筒埴輪の製作技法による川西宏幸の編年(川西編年)

⑤土師器の編年研究

「土師器」古墳時代から平安時代にかけての素焼き土器の総称

古墳の出現とほぼ同時期から(古墳出現期の土器を「古式土師器」とも呼ぶ)

畿内地域 弥生土器(畿内第V様式)⇒(庄内式)⇒土師器(布留式)

関東地方の土師器編年



方格規矩鏡

五領式（石田川式）⇒⇒和泉式⇒⇒鬼高式⇒⇒⇒真間式⇒⇒⇒国分式
 3c 後～4c 5c 代 5c 後～7c 前 7c 後～8c 前 8c 後～11c

古墳を造った人々の生活を集落遺跡から考える

石田川遺蹟、入野遺蹟、子持村黒井峯遺蹟 ※古墳群と集落遺跡の関係

⑥須恵器

ロクロ成形で窰窯（あながま）と呼ばれる地下式・半地下式の登り窯を用いて 1100 度以上の高温で還元焰焼成された焼き締め土器。朝鮮半島からもたらされた技術。大阪府堺市の陶邑古窰跡群が生産拠点

森浩一、田辺昭三（田辺編年）や中村宏（中村編年）らによる編年研究

大阪府南部の丘陵地帯（堺市、和泉市、岸和田市、大阪狭山市）に多数の窰跡が分布する。大阪府南部窰址群（阪南窰址群）とも呼ばれ、古墳時代に朝鮮半島から導入された窰窯を使い、1000 度以上の高温で焼成する須恵器の生産地として最大規模であり、初期須恵器の段階から須恵器を継続的に生産した所として著名である。

陶邑の名称は、崇神天皇の時、倭迹迹日百襲媛命が神懸りして受けた託宣により茅渟県の陶邑において大田田根子を探し出し、大和三輪山の神、大物主を祭る神主とし、それまで続いていた疫病や災害を鎮めたとする日本書紀の記述に基づく。

須恵器は古墳時代の集落からの出土は少なく、古墳に祭祀用供献土器として使用されました。

高坏や器台では高坏が長脚化するなど、儀器化している様子が見られます。畿内に始まる須恵器生産も地方窰が成立し、在地産須恵器の供給も始まります。

安中市秋間地区や吉井藤岡地区、太田笠懸地区などで窰跡が見つかりました。

須恵器とともに「韓式土器」などと呼ばれる朝鮮半島からの直接的な影響が見られる土器も見られます。渡来人の存在が強く想起されます。

⑦副葬品

出現期の古墳に見られる副葬品は鏡・剣・玉類などが中心で、鍬形石や車輪石などの石製品が見られる。群馬県内では元島名將軍塚古墳で石釧が出土しており、これに続いて石製模造品が出土する。

鉄製品は、鉾・剣・太刀・鉄鏃などの武器類や甲冑などが中期の段階で多くなる。農工具や馬具類も副葬品に見られます。

金属製品も当初は半島経由で大陸から伝来し、やがて国内生産されていたことが考えられます。

⑧陵墓治定

陵墓指定された古墳は、古墳の変遷を考える上で非常に重要であるが、宮内庁管理のもと立ち入り調査ができないので、個々で信憑性は異なってくる。

須恵器年表

期	西暦	型式 (陶邑窰)	(陶邑窰)	地方窰	古墳・宮都他
I	A.D. 400				○大阪・履中陵古墳
		TK-73 TK-216 TK-208		○大阪・一須賀2号窰	○大阪・応神陵古墳
	500	TK-23 TK-47	(ON-46) 宮城・大蓮寺窰 (MT-84) 愛知・東山218号窰 (KM-1) 島根・迫谷2号窰	○島根・迫谷2号窰 ○島根・高畑窰 ○長野・松ノ山窰	○大阪・仁徳陵古墳 ○島根・金崎古墳 ○埼玉・稲荷山古墳
		MT-15			○福岡・岩戸山古墳
II		TK-10			
	600	TK-43 TK-209	(MT-85)		○奈良・飛鳥寺
				○京都・幡枝窰	
III		TK-217			
		TK-46	(TK-80)	○兵庫・庄瀬山1号窰	
	700	TK-48 MT-21			○滋賀・近江京 ○奈良・藤原京 ○奈良・平城京
			(KM-16) (TK-53)		○国分寺・尼寺の造営 ○地方官衙の整備
IV	800	TK-7			○京都・長岡京 ○京都・平安京
		MT-83			

*陶邑地区区分の略号 TK=高蔵 MT=陶器山 ON=大野池 KM=光明池

図1 田辺昭三氏が「須恵器大成」に示された須恵器年表

(3) 火山灰考古学の成果

古墳は地面に盛土して築くことから、古墳の下には古墳時代の地表面が残っていると考えられます。尾崎喜佐雄博士は「墳丘下の黒色土層」がこれにあたりと考へ、実際に発掘調査で確認することができます。

実際の発掘調査で、群馬県内の遺跡では浅間山や榛名山の火山活動による降下火山灰層が確認され、その降下年代も埋没した遺構や出土遺物から、年代を推定する重要な要素となっています。

浅間山降下火山灰は、新しい方からA B C Dの名称が付加され、古墳墳丘下では浅間C軽石(As-C)が確認でき、古墳の周溝埋没土の上層では浅間B軽石(As-B、1108年降下)が見られることがあります。

また、榛名山二ツ岳は古墳時代に二度の噴火活動で渋川市周辺は大きな被害を受けたことが黒井峯遺跡や金井東裏遺跡の発掘調査で明らかとなりました。

群馬県下の遺跡の発掘調査では、こうした降下火山灰が遺跡の年代比定に重要な役割を果たしています。

昔も今も火山灰の大地の上に私たちの生活が営まれています。

近世		浅間A(天明)テフラ(As-A)
中世	黒	浅間B(天仁)テフラ(As-B)
古代		
	古色	榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP) 榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)
	墳	浅間Cテフラ(As-C)
弥生		
	土	浅間Dテフラ(As-D)
縄		
	文	鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)
	関	浅間草津テフラ・浅間板鼻黄色テフラ(As-k/As-YP/As-Km1/UG)
		浅間大窪沢2テフラ(As-ok2)
		浅間大窪沢1テフラ(As-ok1)
	旧東	浅間白糸テフラ(As-Sr)
	石	浅間板鼻褐色テフラ群(As-BP)
		浅間室田テフラ(As-MP)
	器	始良Tnテフラ(AT)
	層	赤城鹿沼テフラ(Ag-KP)
		榛名八崎テフラ(Hr-HP)
		赤城湯の口テフラ(Ag-UP)

5 古墳時代を探る～畿内の様相と上毛野の古墳～

(1) 古墳出現の様相～始まりは大和～

- ① 箸墓古墳と纏向遺跡
- ② 黒塚古墳
- ③ 桜井茶臼山古墳
- ④ メスリ山古墳
- ⑤ 椿井大塚山古墳

箸墓古墳は大和盆地の東、三輪山の麓に広がるオオヤマト古墳群中(大和・柳本・纏向)にあり、纏向遺跡に存在します。箸墓と同時期の初期古墳の一群がこの遺跡に存在し注目されています。

黒塚古墳は箸墓に近い時期の古墳として注目され、出現段階の古墳の様相をよく示しています。三角縁神獣鏡の大量出土で注目されたのが椿井大塚山古墳ですが、この黒塚古墳は埋葬時の銅鏡の意味を考えさせる好例と言えます。また、桜井茶臼山古墳はその柄鏡型の墳形が初期古墳の在り方をよく示し、竪穴式石室が注目されました。メスリ山古墳は巨大な埴輪が墳頂部に方形区画で配置されて注目されて、埴輪祭祀の初期の好例です。この纏向遺跡は古墳時代初頭の中心地であり、出土する土器の多くが他の地域から持ち込まれており、一方で、ここから始まる前方後円墳墓制の全国展開が大和王権の拡大と関係していると考えられ、ここから古墳時代が始まると考えられます。



(2) 上毛野の出現期の古墳及び前期から中期の古墳（竪穴系主体部）

①上毛野の出現期の古墳として、元島名将軍塚古墳、前橋八幡山古墳、足利市藤本観音山古墳があげられ、いずれも前方後方墳ということが注目されます。

これらに先行して前方後方形周溝墓も確認されている。底部穿孔壺形土器や特殊器台などが古墳祭祀のために作られている。下郷遺跡・堀ノ内遺跡

②前方後円墳として、前橋天神山古墳が造られ、次に倉賀野正六古墳群の浅間山古墳と大鶴巻古墳が造営される。

前橋天神山古墳、北山茶臼山西古墳

※右の表は白石太一郎による 120m 以上の大型前方後円墳の都道府県別分布表である。

古墳分布と同様に、畿内（奈良・大阪）が中心で岡山が続き、群馬県が第4位となって、東国における上毛野の優位性を示している。浅間山古墳は上毛野に最初に登場する大型前方後円墳であり、これに後出して太田天神山古墳が登場する。

③長持形石棺・舟形石棺を埋葬主体とする古墳

太田天神山古墳、お富士山古墳
岩鼻不動山古墳、若宮八幡北古墳、上並榎稻荷塚古墳

保渡田古墳群 保渡田薬師塚古墳、井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳

八幡古墳群 平塚古墳

※太田天神山古墳では長持形石棺が採用されるが、畿内の影響のもとに採用されたもので、多くの古墳に採用されている。長持型石棺や舟形石棺が在地石材を加工して用いられています。

墳丘は葺石で覆われることも大きな特徴であり石棺文化が東国にも広がったことを示し、の都道府県別分布表である。

古墳分布と同様に、畿内（奈良・大阪）が中心で岡山が続き、群馬県が第4位となって、東国における上毛野の優位性を示しています。

畿内では5世紀代に巨大古墳が百舌鳥古市古墳群に造営され、ピークを迎える。6世紀になると五条野丸山古墳を最後に前方後円墳の造営が停止されるが、東国では6世紀いっぱい造営が続きます。

(※右の表は白石太一郎による))

地方	都道府県	300m以上	200-300m	150-200m	120-150m	合計
東北	宮城県	0	0	1	0	1
東北	福島県	0	0	0	1	1
関東	茨城県	0	0	2	1	3
関東	栃木県	0	0	0	1	1
関東	群馬県	0	1	2	7	10
関東	埼玉県	0	0	0	3	3
関東	千葉県	0	0	0	4	4
中部	山梨県	0	0	1	1	2
中部	愛知県	0	0	1	0	1
中部	岐阜県	0	0	0	1	1
中部	三重県	0	0	1	2	3
近畿	滋賀県	0	0	1	1	2
近畿	京都府	0	1	3	3	7
近畿	大阪府	4	8	8	8	28
近畿	奈良県	2	18	5	10	35
近畿	兵庫県	0	0	1	3	4
中国	岡山県	1	1	3	8	13
中国	山口県	0	0	0	1	1
四国	香川県	0	0	0	1	1
九州	福岡県	0	0	0	2	2
九州	宮崎県	0	1	1	0	2
	合計	7基	30基	30基	58基	125基

表1 関東地方の後期大型前方後円墳

(墳丘規模単位：m)

墳丘規模	60~79	80~99	100~119	120以上	計
上野	64	17	15	1	97
下野	8	5	2	1	16
常陸	24	12	2	0	38
下総	9	1	1	0	11
上総	16	6	5	1	28
安房	0	0	0	0	0
武蔵	17	1	6	2	26
相模	0	0	0	0	0
合計	138	42	31	5	216

表2 畿内地方の後期大型前方後円墳

(墳丘規模単位：m)

墳丘規模	60~79	80~99	100~139	140以上	計
大和	8	2	6	4	20
河内	4	2	4	2	12
和泉	0	0	0	0	0
摂津	1	0	0	1	2
山城	4	0	1	0	5
合計	17	4	11	7	39

(4) 横穴式石室の導入と後期古墳

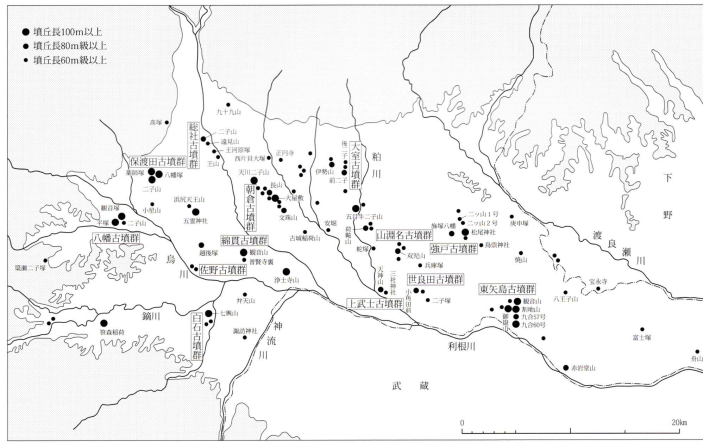
高崎市の遺跡分布を見ると、河川の流域に沿って展開する様子が見えます。遺跡の多くはその地に定住し、生活を営んだ足跡ということになります。こうした遺跡を見るとその土地がいつ頃開発されたのかがわかります。そして、多くの場合古墳時代からの開発が進められてきました。そうした地に集落や古墳が存在します。

古墳群の成立の様子をみると、古墳前期から続くものもあれば、古墳時代後期になって増加する地域もみられます。

6世紀の古墳社会を考えた時に、激動の時代であったことが想像されます。それは、二度にわたっての榛名山二つ岳の噴火活動があったことです。黒井峯遺跡や中筋遺跡は火山灰によって埋もれた村ですし、金井東裏遺跡では甲冑を装着した王とおぼしき古墳時代人が発見されました。井野川流域も非常に大きな影響を受けたことが考えられます。

渋川市の浅田2号墳では埴輪樹立された古墳がそのまま火山灰に埋もれていた様子が調査で明らかにされました。綿貫観音山古墳の石室の側壁石材はこの時噴出した角閃石安山岩を切石加工して組み上げられています。その一方で、葺石が葺かれた様子はありませんでした。石室の規格や構築方法も様々で、後期の群集墳が盛んに造営されることで様々な様子が明らかになっています。八幡観音塚古墳や下佐野漆山古墳は巨石構築の横穴式石室が特長で、墓室を大きく造ることができます。一方、観音山古墳のように載石切組積の古墳も登場しますし、緑野群域では模様積みという精緻な石積みの古墳が見られます。どちらも高度な石工の技術があったことを物語っており、7世紀代の終末期古墳に引き継がれてゆきます。

横穴式石室を持つ小規模な円墳が多く造られます。群集墳とも呼ばれ、各地で知られる古墳群の多くがこれにあたります。高崎市内では乗附御部入古墳群や倉賀野大道南古墳群などが知られていますが、現在は山名古墳群の一部が史跡指定されて残されています。



こうした古墳の多くは様々な開発により姿を消して、現在では記憶と記録にとどまるのみとなっています。その一方で、発掘調査を通してその様子をはっきりつかめたものも、奥原古墳群や小林山台古墳群などがあり、山名土合遺跡でも削平された古墳であっても、馬歯の検出や埴輪や須恵器の出土など、多くの発見がありました。

(5) 高崎を代表する二つの古墳「綿貫観音山古墳」と「八幡観音塚古墳」

綿貫観音山古墳の出土遺物がこのたび一括して国宝に指定される運びとなりました。群馬県立歴史博物館は国宝展示館としての注目をあびています。昭和42年(1967)に始まる発掘調査から半世紀を経てその価値が再認識されました。

八幡観音塚古墳も昭和20年(1945)の石室開口により出土した石室内の副葬品は地元の人々が大切に守り伝えてきて、昭和60年11月に開館した高崎市観音塚考古資料館に収蔵展示されています。後期を代表する二つの前方後円墳がその豊富な副葬品などの出土遺物とともに今日まで高崎の地に残されてきたことは、古墳王国群馬最も誇りうる文化財と言っても過言ではないと思います。

とりわけ、観音山古墳の銅製水瓶と観音塚古墳の承台付銅碗はほぼ完形のまま往時の姿をとどめていることは実に貴重なものと言えます。ここでは、観音塚古墳・観音山古墳の詳説は省かせていただきますが、この二つの古墳が古墳文化の一つの結実点と言うことができるかも知れません。



6 古墳の終焉と律令国家完成にむけての動き

(1) 終末期古墳

古墳がいつまで造営されていたのかは、文献上は「大化の薄葬令」をきっかけに終焉にむかい、その時期は畿内では7世紀の中頃とされます。マルコ山古墳・高松塚古墳・石のカタト古墳など、石槨構造の横穴式石室に変化し、横口式石槨への移行期の様相を示しています。その前段に位置するのが終末期の初期段階を代表する石舞台古墳に代表される巨石横穴式石室の存在です。

前方後円墳の築造が停止されると大型方墳が上毛野では総社古墳群の宝塔山古墳や蛇穴山古墳に見られ、上野国府との関係性が指摘されている。この段階では羨道部の縮小と前庭部の広がりなど、古墳祭祀に大きな変化があったことが考えられる。この時期の古墳では墓前祭に使用された見られる須恵器の出土も見られ、墳丘では大甕を打ち欠いた祭祀が行われた様子を見ることが出来ます。

倉賀野安楽寺古墳や山ノ上古墳などがこの最終段階の古墳として位置づけられます。

(2) 古墳終焉の時期をめぐって

古墳時代研究については発掘調査事例の蓄積によって、当初の研究段階から大きく変化してきていることがあげられる。例えば、上野国の古墳築造の最終段階を山ノ上碑の碑文と山ノ上古墳との関係性で7世紀後半と考へ、7世紀代を通しての古墳築造を想定していたが、研究者の中にはもう少し早い時期と考へるむきもあります。

7世紀代の研究は畿内では飛鳥京や藤原京を中心に律令国家創成期の発掘調査が進み新たな知見を多く得ている。この7世紀代は古墳築造が停止され、かわって寺院造営が行われるようになった時代であり、古墳文化から仏教文化への移行というのが古墳終焉を考へるひとつの鍵となるようです。

6 おわりに

「古墳の造られた時代を探る」という機会を与えていただき、自分が考古学の世界でいかに古墳との関わりが深かったのかを改めて思い知らされたように思います。と同時にその不勉強さもつきつけられて「古墳のすばらしさやその価値」を皆様にお伝えできたか不安がのこります。ただ、今の私たちの生活の礎がこの時代につくられていたということは自信を持って言うことができます。そして、まだまだ知らないことが沢山残っています。自分が古墳についてもう一度考へる機会を持てたこと、そのすばらしさをお伝えできる機会を持てたこと、高崎学にかかわる関係者の皆様のご尽力に感謝して講演を閉じたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

